

# 文化

「ソメイヨシノだけが桜ではない。ヤマザクラ、オオシマザクラ、エドヒガン、カスミザクラなどが日本に野生している代表的な桜だ」。これは「桜博士」と呼ばれた植物学者、笹部新太郎氏（1887～1978年）の言葉である。

近代に品種改良で生まれたソメイヨシノに対し、野生種の桜と人々の関わりは古い。古来、「古事記」の木花之佐久夜夜売は桜を神格化した女神といわれているし、宮中紫宸殿の左近の桜（ヤマザクラ）前の花見の宴で、光源氏が舞や詩を披露して喝采を浴びる「源氏物語」「花宴」が思い浮かぶ。また、岐阜県本巣市の淡墨桜（ヒガンザクラ系）や奈良県宇陀市橿原の仏隆寺の千年桜（ヤマザクラとエドヒガンの雑種）、滋賀県高島市の清水の桜（エドヒガン）など、各地のヤマザクラやヒガンザクラ系の老桜は大切に守られてきた。

桜餅の葉は塩漬けにより独特の芳香を放つオオシマザクラの若葉だし、浮世絵などの版木に

## 野元 正



造作家。造園家。元神戸市職員。昭和20年、東京都生まれ。京都大学農学部卒業。平成6年に「水の箱」で神戸エール文学賞佳作賞。91年に『絵巻の家』（編集工房ノア）で神戸エール文学賞を受賞。17年には、公園緑地行政などの功労者を表彰する北村賞を受けた。

は細工に適した桜材が多い。茶筒や鉦の鞘などには桜皮を使った。樽細工という装飾が施されるし、湯呑みや茶壺、暖箱などには桜文様が凝らされる。もちろん多くの人々が桜を誂い、花見を楽しんできた。このように日本古来の桜は、日本人の心に深く根付いている。

桜の季節が近づくと、私はいつも水上勉の小説「櫻守」のモデルともなった笹部氏を思い出す。学者のように机上でものを考えるのではなく、研究家であると同時に実践家でもあった。古代より、日本伝統の桜は朱のさした淡緑の葉とともに咲くヤマザクラ（園芸種・里桜も含む）だ。近頃、流行っているソメイヨシノは違う一と言いつつ、また、「美しい桜の伝統は日常

# 桜の国支えた古来種の育成

衰退を嘆いた。自叙伝「櫻男行状」によれば、氏は大阪・堂島の大地主の次男に生まれ、東大法科を出た。一月給取りには絶対なる。男一疋この世に生を享けた甲斐のあるだけのことを遺して死ぬれば本懐ではないか」と父から言われ、一生、職業を持たず、その生涯を桜の研究にささげた。私財を投じて名木ありと聞けば訪ね、その接穂をもらい受け、ヤマザクラやエドヒガンなど日本古来種の桜を残そうと、多くの名木の接木や実生を兵庫県宝塚市の私設演習林「亦菜山荘」や京都府向日市の苗圃で育てている。

笹部氏は「桜男」として、日本各地の桜育成に飛び回る。大阪市北区の造幣局の桜の通り抜けは毎年4月中旬に見頃を迎え、楽しませてくれる。氏は昭和11年から苗木探しや氏の苗圃からの補植など、その管理に携わった。講演のほか、桜にちな

て、桜への熱き思いと高い見識により、競争という厳しい時局を超えて造幣局の通り抜けは残った。また、兵庫県西宮市の越水浄水場や夙川などの桜の保全にも貢献。昭和35年には岐阜県の御母衣タムの湖底に沈むはずだった樹齢約400年を誇る「荘川桜」（エドヒガン）2本を不可能に近い移植で救った。

氏が大阪から転居した神戸市東灘区の自宅の庭では、「笹部桜」が誕生した。カスミザクラとオオシマザクラ系サトザクラの交雑種と推定される実生の新種桜だ。旧宅の跡地は神戸市が買い取り、現在、岡本南公園となっている。

今年も桜が見頃を迎える。梶井基次郎の「桜の樹の下には」ではないが、私たちが愛でる桜の美しさは、笹部氏はじめ多くの人々の桜を感しむ熱き心があつた。樹の下に埋まっているからだ、と思いたい。



岡本南公園として整備された笹部新太郎氏の自宅跡。毎年春にはエドヒガンなどが咲き誇る神戸市東灘区